

POPULAR BOOKS



著者の蘇解により検印廃止

昭和38年9月25日 発行

危険な童話

著作者 土屋 隆夫

発行者 矢貴 東司

印刷者 小泉 輝章

発行所 株式会社 桃源社

〒 290.

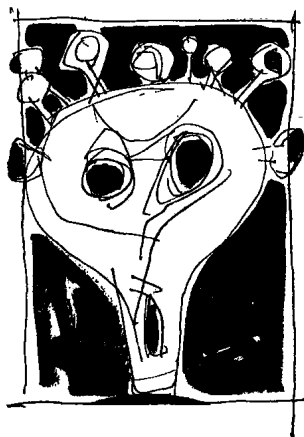
東京都中央区日本橋筋豊町1-12

電話 (671) 4001~2番

振替東京 64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します

1963 ©



危険な童話

土屋隆夫

ポピュラー・ブックス

目次

終章	第十四章	第十三章	第十二章	第十一章	第十章	第九章	第八章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
月崩	对崩	对崩	追死	死	月	兇	面	投	投	展	展	搜	搜	事	「月女抄」
抄	壞	決	求	体	姫	器	影	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	件	抄
.....
1190	1158	1147	1139	1121	1183	1163	1153	1133	1108	1079	1069	1051	1033	1019	7

装
幀
土
井
栄

危険な童話

序章 「月女抄」

お星さまは

あんなにたくさん お友だちがいるのに

お月さまは

いつも ひとりぼっちでした

夜になって お星さまたちが

にぎやかに話しはじめると

お月さまは

よけい さびしそうでした

☆

その平原は、ただ一面に白い砂をもって被われていた。一木もなく、一草もない。茫漠たる白砂の

広がり、その果てを、遠い天空の中へ没していた。

昼間、太陽は平原の真上で輝いた。すると、白い砂原は一樣にその強烈な陽ざしを照りかえし、散乱する光は、この広大な平原を、きらめく渦のように映しだした。

夜になると、平原を風が吹いた。風は平原の遠いかなた、空漠たる闇の中から生れた。それは、巨大な暗黒が、いちどに疾走を開始したような、荒々しい力にあふれていた。

風は砂塵をともなつて走つた。無数の砂塵が一团となつて空中に投げ上げられ、さらに新しい一团が、その後を追うのである。

彼等は、互にぶつかり合い、叩き伏せられ、はね返し、突き入り、廻転し、生きもののような乱舞をつづけながら、平原の中心部に押しよせた。そして、もうもうたる砂煙りが一点に集結すると、そこで急速に成長し、黒い塔のように中空に膨満した。

風がやむのは、すぐその後である。それは、生物が呼吸を停止するのに似ていた。すさまじい怒号や叫喚が、まったく一瞬にして消え去るのだ。わずかに、疾駆した風の名残りをとどめるものは、いま、平原の中央に現出した砂塵の塔だけであった。

塔——それはまさしく塔であった。いや、楼閣と呼ぶべきだったかも知れない。なぜなら、平原をおおう濃い闇の中に、影のようにそびえたつ砂塵の密集、その巨大な、厚いふくらみを通して、夜ごと、かすかな女のすすり泣きが洩れたからである。嗚咽はときどき途絶え、ひそかな吐息がそれにつ

づいた。

すべてが幻影だといふのか。それならば、その中から聞こえる衣きぬずれの音、たゆたげに動きまわる小さな足音、ほのかな香の匂いを、どう説明するのであろうか。

砂塵の塔が、まぎれもなく一個の楼閣であり、そこに住む一人の女のいることは、疑いもない事実であった。

暁方の太陽が、最初の光をこの平原に投げかけると、楼閣は、その高い頂上から、音もなく崩れ始めた。そしてそこに、一人の女が、恥じらうように、光を避けて立っている姿を見出すことができた。

女は、白い布片をもって顔をおおっていた。だから、その容貌も、さだかではない。第一、崩壊する楼閣からは、無数の砂塵が、霧のように降りそそぎ、みるみるうちに、女のからだをおしつみ、平原の底ふかく、その姿を消し去ったからである。

ただ、女の姿が、まさに埋没されようとする寸前、布片につつまれた顔を上げて、女は短い言葉を叫んだ。

「あなたが、こうしたのよ」

その叫びには、女の悲しみがこもっていた。はげしい怒りが感じられた。だが、女は誰に向って叫んだのか。その時、女の頭上に見えたものは、ただ、明るく輝く太陽だけであった。

「あなたが、こうしたのよ」

勿論、その短い言葉を、誰もが聞いたというわけではない。けれど、地上に住む人々は、その平原に行われる夜ごとの営みを、そのむなししい繰りかえしを、その砂塵の楼閣を、そこに住む女存在を、ひとりとして疑うものはなかった。

彼等は、楼閣を月宮殿と名づけ、その女を月姫と呼んだ……

ここに記した一文は、同人雑誌「信州文芸」に掲載された、伊原道人作「月女抄」の冒頭の部分である。

伊原道人といっても、知る人は殆どあるまい。その作品も、数篇の短い小説と、或る演劇誌に発表した一幕物の戯曲の外には、この「月女抄」と題する長編一作が遺っているだけだ。伊原道人は、地方によくある、文学ずきな一青年であった。

「月女抄」は、「信州文芸」の昭和二十×年二月号から連載を始めたが、三回目まで発表しただけで、作品は未完のまま中絶している。原稿用紙にしてほぼ二百枚、全体の構想から考えれば、なお幾章かを書きつづける予定であったろうと思われる。

いま、「信州文芸」の五月号を見ると、編集後記に次の一文が記されている。

——伊原道人君の「月女抄」は、作者急死のため、中絶ということになった。同人一同、心から君

の御冥福をお祈りする。

編集後記だから、短いのは仕方がないとしても、この文章は、いかにもよそよそしい感じだ。しかも、誌面のどこを見ても、この簡略な後記の外には、彼の死を悲しむ一行の記述もなく、作品の中絶を惜しむ言葉とてもない。仲間意識の強い同人雑誌にしては、理解にくるしむ扱いだ、それなりの理由があるのだ。

伊原道人の死は、病死ではなく、自殺であった。それも、発狂して、である。同人たちが、彼の死に触れることを避けたのは、そういう事実に対する遠慮からであったと思われる。

いったい彼は、この作品の中で何を書こうとしたのか。連載を始めた最初の号に、「作者のことば」として、次のように述べている。

「これは、ほくにとつては最初の長篇です。しかし、この作品の原型のようなものは、少年の頃に、いくどか書いたことがあります。だから、この物語の背景となっている月の世界は、ほくにとつて馴染みふかい土地であり、そこに住む女も、ほくにとつては、愛を語り得るただ一人の女性なのです。すこしお読みくだされば判ると思いますが、この作品の発想は、エスキモーの人々によって語られて来た『月姫伝承』によるものです。

かつて、太陽の妹であった月は、或る日、兄の怒りに触れて、美しい顔の半面を焼かれてしまう。

地上に夜がくるのは、彼女の焼けただれた半面が我々に向けられる時であり、月光を仰ぎみるのは、その美しい半面が、我々に笑いかける時だけだという……この伝説は、まだ少年だったほくをひどく悲しませ、そこに住む不幸な女性に、ほくは、あこがれと思慕しほの情をさえ感じたものでした。

彼女は、ほくの幻想の中に、確かに実在し、それは、思春期のほくにとっては、性愛の対象でさえありました。ほくは、自分の寝室で、月光を浴びながら、始めて自慰をしたことを覚えていきます。

『月女抄』は、彼女とほくが営んだ、ひそかな生活の記録であり、天界の孤独に堪えかねた彼女が、ほくの胸にとび込んで来た日から今日までの、すこし風変りな打明け話です。

ほくはいま、太陽の怒り、星たちの嫉妬を覚悟しながら、この筆をとります」

これだけ読んでみても、彼が「月女抄」の執筆には、かなりの情熱をもっていたことが判る。しかし、この作品は、不評であった。

「地上の一少年と、月の女との交歓という、作者の意図は悪くないが、作品としては失敗だ。こういう幻想的な、大人の童話を書くには、伊原の筆はナマだし、俗臭が鼻をつく。とくに、少年と月女の交合を描写した場面など、いま流行のエロ小説と変りがない」

読者欄に載った手痛い批評だ。そのほかに、

「伊原道人は、作家として最も必要な詩心を欠いている。澄んだ、美しい目がない。ファンタジーに

浸りきれない作者だということが判った。宮沢賢治を読んで出直すべきだと思う」

というような、皮肉な言葉も寄せられた。

伊原の目が急に落ちくほみ、家人とも言葉をかわさなくなったのは、この頃だという。

そんな或る日、彼は同人たちの会合に出席して、こう言った。

「こんどの作品は、もう投げ出したいよ」

すぐ、その言葉に応じるものはなかった。同人たちの間にも、彼に長篇を書かせたのは失敗だ、という反省があったからだ。

くらい、沈み込んだ伊原の表情を見て、それでも一人が取りなすように言った。

「まあとにかく、書き上げてみるんだな。どんな作品にしても、完結していなければ評価の対象にはならんぜ」

「しかし——」

「くさるなよ。コテコテにやられながら、オレ達は成長するんだからな」

「うむ」

と膝に目をおとしながら、彼はボソリと、呟くように言った。

「オレは、早く気が狂えばいいと思っっているんだ——」

「おい、おい」

同人の一人が、顔をのぞきこんだが、彼はそのままの姿勢で言った。

「狂人になれば、オレはもつと自由に、自分の幻想の世界に入りこんでいけるからな。文字は書けなくても、オレの華麗な夢は描くことができるんだ。オレは……」

と言いかけたが、不意に立上がった。

「今日は失敬する」

そのまま、会合の席にあてられた喫茶店の階段を降りていった。

「伊原が発狂したらしい」という噂さが、同人たちに伝えられたのは、それから間もなくだった。四月に入って、最初に行われた編集会議の席で、同人のひとりが、言いにくそうに、その話をした。

「伊原について、どうもいやな噂さがあるんだ。あいつは、気が変になったというんだがねえ」

「あら、私も聞いたわ」

と、同人の若い女教師が言った。

「例の、郵便局の一件でしよう？」

「そうだよ。郵便局の女事務員が、ひどく困っているそうさ。月に住む女と、打合わせをしたいが住所を忘れた、すぐに調べて電報をうってくれと頼むらしいんだ。事務員がことわると、じゃ電話で話を

するから、すぐ呼び出せとネバる。局長が出て来て、月には電話がありませんと言った。すると、そんなバカなことはない、お前たちは、オレとあの女の仲をさくつもりかと怒鳴るんだそうだ……」

「妹さんにも、そうなんですって」

と女教師があとをつづけた。

「月の女から、オレ宛に小包がとどいている筈だ。お前がそれをかくしたんだろう。頼むから出してくれと、泣きながらせがむんですって……」

「事実だとすれば、問題だね」

「伊原も文学を断念する時が来たな」

「文学どころじゃないわ。どうして家の人は、入院させてやらないのかしら……」

女教師の言葉に、別の同人が、吐き出すように言った。

「貧乏なんだよ。入院なんかできる身分じゃない。オレは、あいつの家庭を知っている」

それから、不意に、挑むような目つきで、彼は同人たちを見廻した。

「きみたちは、あいつの指を見たことがあるか。ひび破れた爪に、砂と赤黒い血がしみ込んでいます。洗ったって落ちやしないんだ。あいつはネ、中学の卒業式をすませた日に、すぐ千曲川の河原へ行った。判るかい。あいつは、そこで砂利上げのアルバイトをやって、先生に贈る記念品代を稼いだのだ。その生活がずっと続いてきた。家には、寝たきりのおふくろと、酒のみのおやじがいる。それに